

歴史言語学と言語の歴史¹

.....

1 . あらゆる科学の原理、それは絶対的客観性である：《在るがままのことを語る》²(プラトン)。どのような対象であってもそれに関連する学問領域の意味と構成要素、およびその相互関係は、まったくそれぞれの学問が適用される対象の《現実の》構成要素と本質に依存している³。このことを考慮すれば、われわれの基本的テーゼとして、——理論的にみれば基礎付けられておらず、また思弁的にも矛盾しているが、大々的に広まっている昨今の考え方には対立しているが——言語の歴史は、体系的記述また共時的・機能的分析よりもむしろ現実存在しているその仕方に対応しているのであり——または、寧ろ歴史だけが正確に対応していて——、まさに言語の歴史的形式である言語一般、少なくとも特定言語の存在の仕方に対応している、ということにすぎない。

¹ 訳注：オリジナル論文のタイトル：《Linguistica storica e storia delle lingue》, *La posizione attuale della linguistica storica nell'ambito delle discipline linguistiche* (=Atti del Convegno Lincei, 94), Rome, 1992, pp.15-20.

翻訳に使ったものは、この論文の仏語訳の《Linguistique historique et histoire des langues》, *L'homme et son langage*, Editions Peeters, Louvain, Paris, 2001, pp.431-437 である。

² 原文：《dire les choses telles qu'elles sont》

³ 原文：Le sens et la configuration des disciplines se rapportant à quelque objet que ce soit, ainsi que leurs rapports réciproques, dépendent donc de la nature et de la configuration 《réelle》 de l'objet auquel les disciplines s'appliquent.

2. 言語には、実際に 5 つの【どの言語にもあてはまる】⁴普遍的次元（またはこれらによってその本性および表出として限定される次元）がある：つまり創造性またはエネルギー(.....)、物質性、意味性、他者志向性、歴史性⁵の 5 つがそれである：つまり

- a) 言語は、文化の形式である限り、自由なまた創造的な活動である；
- b) 言語は、物質的（音声的、綴字的、等々）形式によって《世界》の中で実現されている；
- c) 言語は何事かを意味している（有意味な《内容》は、すべてなんらかの言語形式に対応している）；
- d) 意味作用 *signification* は、その起源からして、常に《他者に為に》また《他者に対して》使われるものである（つまり言語は、人間の《他者と共にあること》という一義的現れであり、また本質的な在りようであるからである；参照 *Aristote, Politique*）；
- e) 言語は、常に必ず《言語》という形式として提示される、この言語とは歴史的共同体の言語的伝統ということになる。

創造性と物質性は、文化のあらゆる形式にとって普遍的なものである、それらはすべて“物質的形式によって世界の中で実現される創造的活動性”である。意味性とは、文化のべつの形式とは異なる言語の《特有の差異》⁶である。他者志向性とは、表現的形式の別のタイプの《内容》と関連させて言語的意味を伝える行為の特異な特徴であり、その結果としてこの他者志向性は、言語の歴史性の基盤ということであり、話す主

⁴ 訳注：【 】の部分は訳者が補った部分。

⁵ 訳注：créativité 創造性、matérialité 物質性、sémantique 意味性、altérité 他者志向性、historicité 歴史性、

⁶ 原文：difference spécifique

体者より構成されている共同体および、その伝統への連帯感の恒常的な表出であり、それゆえ社会的本質、また人間の内存的歴史性の恒常的な表出である。

3. 個々人で実現され、また歴史的共同体の伝統に基づいて常に実現される人間的活動は、**普遍的なものである**ので、言語は、具体的なものとして比較的に自立している3つのレベルを示している：**話すこと一般の普遍的レベル**、**言語の歴史的レベル**、また**ディスコース**（または《テキスト》）の個人的で特有のレベルが、これにあたる。このレベルに対して、**言語知識**の3つのタイプが対応している（1：話すこと一般としての知識または**言葉の使い方についての知識**⁷；2：あれこれの言語を話すことの知識、つまり**特有言語の知識**⁸；3：またディスコースまたはテキストを創り出す知識、つまり**表現的知識**⁹）また内容に関しては特有の3つのタイプがある（**指示** désignation、**意味** signifié、**意** sens がこれである）¹⁰、また話すことの各レベルに対応している言語的知識に適応する3つのタイプ（**適合** congruence、**訂正** correction、**適正**

⁷ 原文：savoir élocutionnel

⁸ 原文：savoir idiomatique

⁹ 原文：savoir expressif

¹⁰ 訳注：江沢建之助訳「人間と言語」Der Mensch und seine Sprache の訳者注で次のように解説している：『言語によって表現される内容すなわち広義の「意味」に Coseriu は三つのタイプを区別する：「意味」(signifié)、「指示」(désignation)、「意」(sens)。「意味」はその言語においてそれぞれの語、句、文について一義的に内容として与えられるもので、「指示」の内容は言語的手段によって示される言語外の現実自体であり、「意」は言(げん)において生ずるその場の意味である。例、「僕」、「あたし」、「私」はそれぞれ違った「意味」を持っているが、「指示」としては同じである。【外国語の本の】翻訳は、「指示」と「意」を再現するもので、「意味」を訳すことはできない。』『セリウ言語学選集4，ことばと人間』4頁，(株)三修社、1983年より。

adéquation) である。これらはすべて、3つの大きな言語学的学問分野の根拠を示している：1) **話すこと**についての普遍的言語学(《普遍文法》ではない!)：2) **言語**の歴史的レベルでの言語学：および3) **ディスコース**(または《テキスト》)の個人レベルの言語学がこれである。その対象に関しては、言語についてのあらゆる言語学(記述であれ歴史であれ)は、**歴史言語学**である、というのは、言語の歴史的形式に関する言語学であるからである。《記述言語学》と《歴史言語学》間にある現行の対立は、意味がなく、単に用語上の約束事にしかすぎない；つまり厳密に言って、しかし無制限ということではないが、**体系的記述**(または《構造的記述》)と**言語の歴史**の間の対立を認めることができる。

4. 歴史的言語と機能的言語

言語的知識は、技術的知識(《行為を為すための知識¹¹⁾》)である。この意味で、特有言語の知識としての言語は、話すことの歴史的技術である。しかしながら、歴史的言語に対応する特有言語の知識は、唯一のまた単一の体系ではない。これは部分的には類似的であり、また幾分か分離的な伝統の集合体¹²⁾である。歴史的言語の中で、創造性は、(《言語の有様¹³⁾》の中で)多様性として現れている、また他者志向性は、均質性としてまたは統一性として現れている。共通言語および規範的言語または《標準的》言語(それぞれの人に固有の多様性を伴っている)での様々なレベルで、また(観念的に共通言語というものを欠いている)歴史的言語の

¹¹ 原文：savoir faire

¹² 原文：ensemble

¹³ 原文：états de langue

初源的レベルにおいても、基本的に3つの多様性のタイプが見られる：

1) **通域的**な多様性 *variété diatopique* (空間における) 2) **通層的**な多様性 *diastatique* (社会 - 文化的な) 3) **通樣的**な多様性 *diaphasique* (《文体的な》)がある。また逆の意味で、統一性という視点より見ると3つのタイプがあることになる：1) **共域的**(*syntopique*)な統一性 (《方言》) 2) **共層的**(*synstratique*)な統一性 (言語のレベル) 3) **共樣的**(*symphasique*)な統一性 (言語の文体)がある¹⁴。この3つの視点を統一するもの、それは**機能的言語**であり、これはそのつど均質的であるとその範囲が限定されている体系といえることができる。それゆえ、歴史的言語は、方言、レベル、言語の文体の複合的集合体であり (各々の有様は、一つの視点から見たときに統一的であるにすぎない) または言い換えれば、お互いに歴史的に結び付けられた機能的言語の更なる複合的な集合体である。言語を実際に使う場には、あらゆる話す主体 (話し手) は、自身の歴史的言語の枠内で多言語使用者である。話し手は、様々な程度はあるが一つの方言、一つの言語レベル、また多くのことばの様式を積極的にまた消極的にであるが知っていると言える、すなわち、話し手は、(自身の発話で有効に利用できる) 一連の機能的言語を使っているということに

¹⁴ 訳注：この用語は、次に示すような関係にある (訳語は『イタリア語の起源』、岩倉具忠監修、橋本勝雄訳 京都大学学術出版会、2007 年を参考にした)：

<i>variété diatopique</i>	<i>variété diastratique</i>	<i>variété diaphasique</i> : dia- : 通
<i>unité syntopique</i>	<i>unité synstratique</i>	<i>unité symphasique</i> : syn- : 共
通域的 (共域的)	通層的 (共層的)	通樣的 (共樣的) : 訳語
<i>diatópico sintópico</i>	<i>diastático sinstrático</i>	<i>diafático sinfático</i> : スペイン語
<i>diatopic</i>	<i>diastatic</i>	<i>diaphasic</i> : 英語

またコセリウの用語に、*diatopía* 地域層, *diastatía* 社会層, *diafasís* 文体層がある。これらの用語は、コセリウによると L. Flydal の論文 “Remarques sur certains rapports entre le style et l'état de langue” *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap*, XVI, 1951, pp.240-57 から作ったとのこと (*Sentido y tareas de la dialectología*, 1982, p.8 による)。

なる。

5 . 言語の内存的活動性¹⁵

さらに、言語の有様 *état de langue* は、既に実現された技術である限り、また静止しているスクリーン上に共時的に投影されたものとして見れば、静的なものである。現実において言語はどのような時でも、二重の動きの中に存在している、1 つは多様性へ向かう方向（普及と後退）への中に、もう一つは理念的に統一的体系の更新へと向かう方向の中に、存在している。同じように、機能的言語は、動きの中に存在している。これは、言語は《作られたもの *chose faite*》、**エルゴン** *ergon* 以外の何ものでもないからであり、また逆に言えば、本質的で基本的には行動する方法についての体系¹⁶、つまり開かれた技術であり、その結果として、歴史の中で漸進的に実現される可能性または潜在性の体系である。生産的技術（《行為を為すための知識》）としての特有語の知識には、3つのレベルがある：1）物質的に実現され、伝統となった体系（言語の規範 *norme*）、2）機能的に《行動する方法》の集合体（体系）、および3）体系の上位にあり、機能的カテゴリーや物質的手順の一貫性のある集合体（言語的タイプ）。ということで、言語は《作られた》ものではなく、言語は**創造され**、形成され、継続的に再生産されるのである（しかしながら、大部分においてはいわゆる明らかな変化というものはなく、伝統と全く合致するものである）。《言語変化》と呼ばれているものは、創造性の歴史的客観化¹⁷以外の何ものでもなく、言い換えれば言語変化とは、適切

¹⁵ 原文：dynamicité intrinsèque de la langue

¹⁶ 原文：un système de façons d'agir

¹⁷ 原文：l'objectivation historique de la créativité

に言うとするば（自然界にある物のような）《変化》でもまた《進化》ではなく、言語的伝統の《創造および再創造》、つまり伝統としての言語の発現である。この意味で、言語の存在の仕方は、言語的変転と合致することになる。

6．言語的共時性と言語的通時性

言語を慣例的に言語的な**唯一の体系**へと単純化してしまうことによって、人はしばしば、共時態 synchronie(共時的的研究として)を、体系的（または構造的）記述として、また通時態 diachronie を、体系にある構造の歴史的発展の研究（《歴史文法》）としてばかりではなく、言語の歴史とし解している。しかしながら、この意味で対立する2つの用語は、相関的なものではない。共時態に対応するのは、統一的体系の記述（広義には音韻論とか語彙論を含む《文法》）だけではなく、また3つの広範囲な多様性の記述（**方言学、社会言語学、言語文体論**）がある。言語の歴史に対応するものとして、(少なくとも)共時態においては4つの異なる学問分野がある。逆に、体系的（構造的、生成的等々）記述の対象は、必然的に機能的言語（または機能的言語に慣習的に単純化された言語）ということになる、言い換えれば《共時的》体系であるだけでなく、さらに《共域的》、《共層的》また《共樣的》体系ということになる。¹⁸

本来のまた第一義的意味で解釈されたソシュールの区分は、確かに首尾一貫したものである。しかしながら共時言語学は、歴史的言語にはかわらず、それは明らかに、われわれの言う《機能的言語》にかかわる

¹⁸ 原文: un système non seulement 《synchronique》, mais aussi 《syntopique》, 《synstratique》 et 《symphasique》

のである（事実、この機能的言語は、変化が体系そのものにとって外的なものであると考えることができる厳格に統一的体系にのみ関連しているのであり、また変化とは別の体系の組成の先駆けを示しているという意味でとらえられている）。またソシユールのいう通時態は、言語の歴史ではなく、より明確にすると、体系を変容させる様々な事実の《原子論的》考察である。またさらに、ソシユールの区分は、現実的なものではなく、単に方法論的なものである。言語という現実の中での、《共時的》事実（機能）および通時的事実（変化）は、異なる2つの瞬間を示しているのではなく、ただ1つの瞬間を示しているのである。変化は《内的》であるとする考えかたをする時には、——つまり、変化とは特有言語の技術に固有の活動性¹⁹の結果であり、また既に所与のものとしてある潜在性の実現体（そしてあらゆる変化というものはある意味で、《内的》である）であるとする時には——規範の変化《通時態》があるということとは、体系が機能していること（《共時態》）である、また更に言えば、体系の変化があるということは、言語タイプが機能しているということである²⁰。話し手が言語の創造的行為に適用するものは、言語学者が言う所の歴史的な客観的技術というものではなく、それは常に【話し手によって】解釈された技術である、ということは除いておく²¹。そしてこの解釈というものは、大抵は正しいが、ある場合には、客観的には、《間違った》ものであることもある。つまりそれは、（《誤った》類推によつ

¹⁹ 原文：dynamicité

²⁰ 原文：ce qui est changement (《diachronie》) de la norme est fonctionnement (《synchronie》) du système; et ce qui est changement du système est fonctionnement du type linguistique.

²¹ 原文：A cela près que ce que le sujet parlant applique dans ses actes de création linguistique n'est pas la technique historiquement objective du linguiste, mais toujours une technique interprétée.

て)《再解釈》されたものであることもある。原理的に、規範は、(現実のまたは《再解釈された》)体系の適用によってのみ変化する；体系は、タイプの適用とまた体系そのものの再解釈によって、変化する：タイプは、再解釈によってのみ変化する(タイプは、同一の歴史的言語内にある2つまたはそれ以上が共存していること、また種々の言語間の干渉によって引き起こされているのかもしれない)。

7. 歴史の優位性

われわれは、ここでまず我々のテーゼを確認することができる：確かなこととして言えるのは、歴史のみが、言語の現実の存在に対応している、即ち：

a) 歴史のみが、言語の多様性と均質性を同時に考察できる。体系的記述は、その首尾一貫性なしに多様性を考察することはできない。しかしながら多様性は、雑種のまたは二次的次元ではなく、むしろ言語の内存的次元であり、言語の本質的創造性を反映したものである。また言語は、内的構造を手段としてのみ機能しているのではなく、言語は、話し手にとって既知の多様性を使うことによって機能しているである。また首尾一貫している体系的記述は、現実の言語的慣用について説明しているわけではない。それで例えばイタリア語のテキストで意図的に使われているナポリ風の要素は、単純に言って別の体系の要素であるにすぎない(しかしながら、その機能的《立場：statut》は、ナポリ言葉の体系内で、またミラノとかフィレンツェで使われているディスクール内に収まるようなものでないこともある)。

b) 歴史のみが、発展し続けている同一の機能的言語内で(《古い》、また《新しい》)という通時的に競合している構造間の緊張関係を首尾

一貫して考察することができる。これに反して、異なる体系に属する構造の体系的記述にとっては、非機能的変異体²²であるにすぎない（異なる対立する構造が問題となるのであれば、それは形容矛盾(*contradictio in adiecto*)を構成することになる。例えば現代フランス語の長開母音 *e* と短開母音 *e* の間の差異と非差異のケースを参照のこと）。【言語の】発展の出発点を考慮しないとすると、共時的に競合している構造は、実際には、現実の年代的（また話し手が同じように承知している）関連性の中で考察することはできない。

c) 歴史だけが、恒常的組成の過程内で言語を考察することが可能である：規範の中で、また既に所与のものとなっている言語的技術の体系の中での漸進的実現体は、それぞれ体系のレベルにまた言語的タイプのレベルに対応している。確かに、体系的記述は、言語を開かれた技術としてまた可能性の体系として考察することが可能である（しなければならぬ）、それであらゆる特有言語の技術に固有の内的活動性についてそれぞれの仕方で、またある程度まで考察することができる。さらに、《自からが創り出すものを見とどけている²³(Ortega)》言語だけが、【言語】形式にとって有効な実現体を、またそれを記述せんとする瞬間に《可能》であると思われる創出を記録することが可能であり、またその《現実》を確認することが出来るのである。

d) 歴史は、言語をその話し共同体の精神的および物質的文化と別の

²² 原文：variantes non-fonctionnelles

²³ 原文：： voit les choses en su hacerce

形式と関連させて考察することが出来るのであり、また歴史が、話すこと（同じように語彙的内容または統辞的構造としても同じく）の中にあるすべては、特有語の知識によって限定されるのではなく、言語外的知識²⁴によって限定されることを説明することが出来るのである。逆に言えば、首尾一貫している体系的記述は、《言語それ自体》に限られる、それ故、歪んだ見通し²⁵の中で解釈されることがあるし、また話すことの言語外的な決定要因を解釈するのを断念することもある。

8．統合的言語学としての歴史

上記の議論によって、体系的記述、特に構造的・機能的記述の有効性を否定することはできない、その有効性とは、その対象物にとってのみ適切なものである。このことは、対象物が排除するすべてについて同じように理屈にあっているのである。現代の《記述主義》の力量は、その厳格な《懷疑主義》の内に、つまり方法論的に課されている制限の内に存するのである（その制限が、そのようなものとして認知されている限りは）。むしろ機能的記述が果たした否定しようもない成果を統合的言語科学²⁶というより広い枠組みの中に位置付けようとおもう。それで単にナイーブな《歴史への回帰》を提案しているのではない。事実としては、記述は歴史の外側にあるということではなく、歴史上のどのような瞬間にあるどのような対象物の記述も、その歴史というものの一部である、というごく単純なことによる。それで、《歴史に回帰》する必要はなく、（それを否定しようとした時でも）歴史から外れることは決してないこ

²⁴ 原文：savoirs extralinguistiques

²⁵ 原文：perspective déformée

²⁶ 原文：science linguistique intégrale：統合的言語科学

とを説明すべきである。事実、記述は歴史の中に含まれていて、たとえ部分的で一時的な歴史であっても、それは本来の歴史というものによって確認されるべきものである。記述は既にして歴史である。ここで述べたいことは、(歴史が必然的に内に含む体系的記述を含めて)歴史というものは、まだまだ存在していないと時には言われることがある(体系的で原子論的であり、また共時的であり同時に通時的であり、言語的でありまた同時に非言語的である)ハイブリッドで首尾一貫していない科学、それは**統合的言語科学**であることを明らかにしようとしているにすぎない²⁷。この科学は、その対象物である言語をあらゆる相のもとで、またすべての内的および外的決定要因を考慮して考察しようとするものである。この意味で、われわれは今日でも尚、より良い基盤のもとに **Hermann Paul** の有名な公式：*Sprachwissenschaft*：言語科学——言語についての科学——は、まさに *Sprachgeschichte*, 言語史である、と宣言するのである。

²⁷ 訳注：原文：Ce qu'on veut, c'est seulement essayer de rendre évident que l'histoire (y compris les description systématiques qu'elle contient nécessairement), loin d'être, comme on l'a parfois dit, une science hybride et incohérent (systématique et atomiste en même temps, à la fois synchronique et diachronique, à la fois linguistique et non-linguistique, etc.) est la science linguistique intégrale, qui aspire à considérer ses objets, les langues, sous tous leurs aspects et avec toutes leurs déterminations internes et externes.

関連参考書

この報告書では基本的なことを述べたが多くの複雑な問題が他にもあり、1952 年以降の一連の著作でこの問題について考えてきた、特に：

Sistema, norma y habla, Montevideo, 1952 (*Teoría del lenguaje y lingüística general*, Madrid, 1962)：翻訳「言語体系・言語慣用・言」コセリウ言語学選集、第2巻 pp.11-113 三修社刊

《Sincronía, diacronía y tipología》, *Actas del XI Congreso internacional de Lingüística románica, I*, Madrid, 1968, pp.269-283. 翻訳「共時態、通時態および類型論」コセリウ言語学選集、第4巻 pp.123-139

《Humanwissenschaften und Geschichte》, *Det Norske Videnskaps-Akademi, Arbok* 1978, Oslo, 1979, pp.118-130.

《Vom Primat der Geschichte》, *Sprachwissenschaft*, 5, 1980, pp.125-145.

《Los conceptos de “dialecto”, “nivel” y “estilo de lengua” y el sentido propio de la dialectología》, *Lingüística española actual*, III, 1981, pp.1-32 (reproduit de au Mexique dans un «cahier» de L'ALFAL, intitulé *Sentido y tareas de la dialectología*, Mexique, 1982).

《Linguistic change does not exist》, *Linguistica nuovo ed antica*, I, Galatina, 1983, pp.51-63. trad. française, pp.415-431. *L'homme et son langage*

Traduction de l'italien par Jean Lechanteur, publiée dans *Communication & Cognition*, 25, 2-3 (Grand, 1992), pp.191-198.

Texte original: 《Linguistica storica e storia delle lingue》, *La posizione attuale della linguistica storica nell'ambito delle discipline linguistiche* (=Atti dei Convegni Lincei, 94), Rome, 1992, pp.15-20.